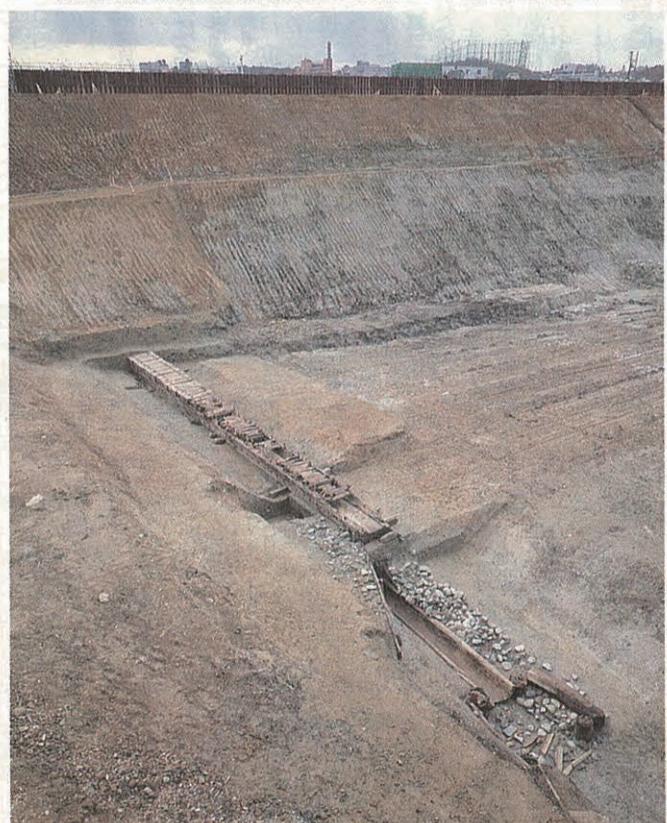




歴史を秘めていた狭山池（調査前の景観）

狭山池と古代の土木技術

西田 一彦



堤体の底部に現れた上下 2 本の木製樋管。下の樋管は上のものより 1000 年ほど前の建築と推定される。

工事は順調に進み、本年一月には、堤体断面全体が露出したが、当初の推定どおり古い堤体がつぎつぎと姿を現した。しかし実態は非常に複雑で、一部にはすべり崩壊のあとも見られた。その後、池の堆積物に液状化の痕跡である砂脈が発見されるに及んで、その原因が地震によるものであることが確かとなってきた。さらに堤体は敷葉工法と呼ばれる現在の補強土工法の元祖に当たる工法で入念に施工されていた。また、堤体の底部には上下二本の木製樋管が現れた。下部のものは横の大木をくりぬいたもの、上部のものは桧が巧みに組み合わされ下部のものより優れた技術が使われていた。年輪年代法の測定によると、上部のものが西暦一六〇八年、片桐旦元の改修によるもの、下部のものは六一六年の築造である。これがわかり、池築造の年代は日本書紀による二千年前から一挙に七世紀初頭まで若がえったのである。

狭山池は現代科学技術によって、その謎が見事に解明されたが、また、その技術によって、市民の憩の場所として、あるいは考古学、土木史研究の拠点として新しく生まれ変わりつつある。

大阪狭山市の中心部を占める狭山池は、わが国で最も古く、また景観の優れた溜池として親しまれ、歴史的研究も盛んに行われてきた。しかし、そのわりに築造の年代や工法については不明な点が多くあった。この池は、もともと小さな灌漑用の溜池として築造されたもので、その後何回かの拡張工事が行われ、現在の面積〇・三六平方キロメートルの形を持つに至ったものとされている。そして、この池ほど築造後に頻繁に補修、改修がくり返されたものも珍しく、その理由も不明のままであった。

近年、大阪府は、この池の老朽化に対処して防災と環境整備の目的で大幅な改修を計画し、昭和五十年から調査を始めた。この計画を知った本学名誉教授で池のほとりにお住まいの故末永雅雄先生は、この機会に池の文化的調査を計画され、昭和六十年大阪狭山市に調査委員会を設けられた。委員会は考古学、歴史学、地理学、地質学、土木工学など各分野の専門家からなり、多角的、総合的に調査が進められた。本学の網干善教教授とともに筆者も委員の一人に加えていただいた。

まずは手始めに、堤体中央部に一本のボーリングを行い、コアサンプルを採取した。それを観察すると真っ黒な有機物の層が何枚も発見された。筆者は過去の経験から、これは昔の堤体表層部にちがいないと考え、現在の堤体内部に古い堤体が潜在することを推定した。この推定は他分野の委員の強い関心を呼ぶところとなり、大阪府はこの堤体を切り開き、幅七〇メートル、高さ一四メートル、厚さ〇・五メートルのスライスにしてまるごと保存する計画を立てた。手順は、高さ一・五メートル、幅二メートルのブロック状の土塊に切り出し、薬液に浸して固めるものである。これは、土を対象としたものでは世界に例のない大規模なもので、数々のハイテク技術が応用されている。

は、パンフレットのような美しいカラー図表が描かれ、淡い風景のシルエットの上に研究の目的や結論のまとめ文が書き込まれているのである。まるで業界の OA ショーに参加した気分になった▼これは上手い手である。パツとしない研究内容でも立派に見えるから、発表者本人も気分良く、作品に呑まれた先生方の辛口の質問を封じることもできる。作り方はいたって簡単。表計算、ワープロソフトを使用すれば、書式、配置等を考えなくても作成できる▼テンプレートの意味は型板。身近なところでは、製図の補助道具として、様々なサイズの○□の穴があいた板を文具屋で見ることができる。图形であろうと、文章であろうと基本となる型の名称として、拡大使用されてきたようだ▼テンプレート使用のは非については、少し心に引っかかるものがある。勿論、型にはめのだから作品に個性はなくなるが、ある程度以上のレベルを保つことができる。一長一短である。「昔は発表の時レイアウトで大いに悩んだものだ」などと繰り言を言っている自分の姿が目に浮かぶ。（C・A）

HEADLINE

3 面 就職シーズンを前に
6 面 関大フォーラム
4・5 面 特集 学生生活実態調査
面 「研究室訪問」ワイド版
面 千里山キャンパス

